

A年特定27 マタイ25章1―13節

【直訳】

1 そのとき 比較されるだろう 天の国は 十人の おとめたちに、
その者たちは 取って 自分たちの灯火を
出て行つた 花婿の迎えのために。

2 だが五人は 彼女たちのうちの あつた 愚かで
そして 五人は 賢い。

3 なぜなら愚かな女たちは 取って 彼女たちの灯火を
取らなかつた 自分たちと共に 油を。

4 だが賢い女たちは 取つた 油を 器の中に 自分たちの灯火と共に。

5 だが遅れていて 花婿が
彼女たちは眠くなつた 皆 そして 彼女たちは眠っていた。

6 だが真夜中に 叫び声が 起こつた、
「見よ 花婿が、

出て行きなさい 「彼の」出迎えのために」。

7 そのとき 起き上がった 皆 おとめたちは それらの
そして 彼女たちは整えた 自分たちの灯火を。

8 だが愚かな女たちは 賢い女たちに 言つた、
「与えてください 私たちに あなたがたの油から、
というのは 私たちの灯火は 消えかかっている」。

9 だが答えた 賢い女たちは 言いつつ、
「確かに それは十分でないでしょう 私たちに そして あなたがたに。
行きなさい むしろ 売る者のもとへ
そして 買いなさい 自分たちに」。

10 だが出かけていて 彼女たちが 買うために
来た 花婿が、
そして 準備している女たちは 入つた 彼と共に 婚宴のために
そして 閉じられた 戸が。

11 だが後で 来る 残つたおとめたちも 言いつつ、
「主よ、 主よ、 開けてください 私たちに」。

12 だが彼は 答えて 言つた、
「まことに 私は言う あなたがたに、私は知らない あなたがたを」。

13 それで目覚めていなさい、
というのは あなたがたは知らない その日を また その時を。

〔新共同訳〕

1 「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれもし火を持って、花婿を迎えに出て行く。 2 そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。 3 愚かなおとめたちは、もし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。 4 賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。 5 ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。 6 真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声があった。 7 そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。 8 愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』 9 賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行つて、自分の分を買つて来なさい。』 10 愚かなおとめたちが買いに行つている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。 11 その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言つた。 12 しかし主人は、『はつきり言つておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。 13 だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」

①構成

① 「十人のおとめ」のたとえは、終末を前にして生きるキリスト者の生き方をテーマとする一連のたとえ話の一つである。

ノアの洪水 (二四 36—44)

忠実な僕と悪い僕 (二四 45—51)

十人のおとめ (二五 1—13)

これらのたとえ話は、来たるべき審判の日を視野に置き、終末の日に備えて「目を覚ましていよう」と戒めているが、次の三つの要素はどのたとえ話にも共通している。

② 予期できぬ到来——終末はいつ来るか分からない。

③ 驚き——用意を怠った者にとって、終末は文字通りに「寝耳に水」の驚きである。

④ 分離——終末における裁きは人々の間に分離をもたらす。

「十人のおとめ」のたとえでも、花婿は遅れて真夜中に到着し(②)、眠り込んだおとめは「見よ、花婿が」という声に驚いて飛び起き(③)、用意を怠った愚かなおとめは閉め出され、分離される(④)。このたとえは、「十人のおとめ」の行動を描き出すことによって、キリスト者が取るべき姿勢を教えている。

⑤ 1 節は表題のような役割を果たしており、「自分たちの灯火を取つて、花婿の迎えのために出て行く」務めを持つたおとめたちが主人公になる。一方、13 節はこのたとえの結びであり、たとえのねらいが明らかにされる。その日、その時を知らないのだから、「目覚めていなさい」と教える。

⑥ 2—12 節がたとえの本体となるが、この本体はさらに三つの段落に分けられる。2—5 節はいわば第一幕であり、主人公である「十人のおとめ」の様子が描き出される。6—9 節は展開部

であり、花婿の到来がもたらす混乱が語られる。10―12節は結末であり、「十人のおとめ」の運命が決定的に分離することが述べられる。

④ イエスが語ったたとえの原初の形では、ただ単純に「すぐそこに迫った終末的な破局」を述べたうえであったものが、マタイによって、遅れているキリストの再臨という視点から読み直されたのかもしれない。しかし、「再臨するキリスト」の視点から読み直したとしても、イエスの意図から大きく逸脱したわけではない。イエスは神の支配と裁きの到来を語り、回心の緊急性を力説したが、マタイは、終末をキリストの再臨と関連づけることによって、回心の必要をさらに強く主張したと言えるからである。

⑤ しかも、キリストの再臨はキリストを信じる者にとつては、救いの成就の時である。救いであれば、終末を恐れる必要はない。従って、将来に心を奪われ、今の生活が疎かになることもなく、むしろ救いを待ち望みながら、今をしつかりと生きることになる。

⑥ パウロは1テサロニケ5章1節以下で終末について、「盗人が夜やって来るように、主の日は来るということ、あなたがた自身よく知っているからです。人々が『無事だ。安全だ』と言っているそのやさきに、突然、破滅が襲うのです。…しかし、兄弟たち、あなたがたは暗闇の中にいるではありません。ですから、主の日が、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。…神は、…わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです」と述べている。キリストを信じる「あなたがた」には、主の日は突然に襲うことなく、むしろ救いの日である。このような立場に立つなら、終末はいつ来てもよい日であり、終末の遅れも大きな問題にはならない。

② 十人のおとめたち（1節）

⑦ 1節の「比較されるだろう」は未来形であるが、未来形が使われたのは、花婿が到来する終末の時がテーマとなっているからである。

⑧ 旧約聖書が描く婚礼は、雅歌に典型的に見られるように、花婿と花嫁との間に見られる喜びに心があふれる。そして、この喜びは神とイスラエルの関係に適用され、平和をもたらす神を王として喜び迎えることが民の責務とされた。こうして、イスラエルは「ヤーウエの花嫁」と呼ばれるようになる（エレ二2、イザ四九18）。新約聖書になると、神とイスラエルの関係が、キリストと教会の関係に移し替えられ、教会は花婿であるキリストを喜び迎える花嫁にたとえられていく（2コリ一12、黙一九7・9、二二2・9）。このたとえでは教会は花嫁ではなく、「十人のおとめ」にたとえられている。しかし、喜びの時であると同時に、目を覚まして待つべき終末の時を婚礼にたとえているのは明らかである。

⑨ 「灯火」は婚宴での踊りなどを照らし出すためのたいまつのことである。ぼろ布を先に巻き付け、油を染み込ませたもので、少々の風では消えないが、燃焼時間は十五分ほどなので、途中で油を補給する必要があった。

③ 愚かさ賢さ（2―5節）

⑩ 十人のおとめのうち、五人は愚かで、五人は賢いおとめであったが、その違いを生み出す原因が、キアスムス（交差配列法）を用いて、3―4節に描かれている。

自分たちの灯火を取って

油を取らなかった

油を取った

自分たちの灯火と共に

油を用意していたかどうか、愚かさや賢さとの分かれ目になる。しかも、5節には、賢い者も含めて全員が「眠っていた」とあるから、「油を取った」かどうか、両者を分けるしるしとされているのは明らかである。賢さを示すしるしは「油」にある。マタイ7章24―26節（「家と土台」）によれば、「愚かな者」とは御言葉を聞いても実行しない者のことであり、「賢い者」とは実行する者のことである。

⑥当時の習慣では、婚宴は誰もが参加できるように、夕方から始まるのが普通であった。婚宴に先立ち、花婿は花嫁を迎えるために、友人たちと行列を作り、花嫁の家に向かう。花嫁の家では親族と会見し、何らかの理由で結婚が解消されるときに花嫁に支払われる金額について交渉が行われ、それが終わると、花嫁と婚約の客を加えて、いつそにぎやかになった行列は花婿の家に行き、婚宴が開かれた。

④見よ、花婿が（6―9節）

⑥6節では「見よ、花婿が」という表現によって、花婿の到来は思いもかけぬ時に起こることが強調されている。花婿の到着を知らせる叫び声があったとき、眠っていたおとめたちは皆起き上がり、「自分たちの灯火を整えた」（7節）。「整えた」と訳された動詞は、コスモス（秩序・宇宙）から派生した言葉で、「秩序づける・飾る」を意味する。もちろん、ここでは「燃えかすを取り除き、再び燃えるようにと油をつぎたす」ことを意味する。しかし、もし火は暗闇を照らすだけではなく、行列を飾り立てる小道具にもなるので、このような動詞が使われたのかもしれない。⑥たとえを解釈するとき常に問題となることは、たとえに登場するさまざまな要素が、たとえられている事柄（たとえの意味）と、どの程度まで関係しているかを定めることである。このたとえが、予期せぬ時に到来する終末的な裁きを視野に入れていられるのは明らかである。しかし、「油…：灯火」は、たとえが一つの物語として成り立つためにのみ登場したのにすぎないのか、それともたとえの意味（終末的な裁き）と関連する重要な要素として使われているかどうかを判断するのは難しいことになる。その判定をいっそう複雑にするのは、イエスが語ったときのたとえの意味と、それを伝え継ぎ、福音書へとまとめ上げた人々が読み取った意味との間に、ずれが起こり、時には無視できないほどの相違を生み出すことがあり得るといふ事実である。

⑦解釈者の中には、「賢いおとめ」によって異邦人が指され、「愚かなおとめ」によってイスラエルが意味されていると考える人もいる。あるいは、5節の「眠っていた」は終末の前に死んだ人を表し、7節の「皆起き上がった」は終末の裁きのために復活することを表している、と考える人もいる（確かに、「起き上がる」と訳された動詞エゲイローは「復活する」の意味でも使われる）。そのような可能性が皆無とは言えないまでも、解釈を広げすぎると、イエスが意図した意味が加えられてあいまいになる危険性がある。

⑤私はあなたがたを知らない（10―12節）

⑤ 「戸が閉じられた」（10節）という表現をラビたちは「好機を逸する」の意味で使っている。現実の婚宴では、戸を閉めてしまい、入場を拒絶するようなことは考えにくいことである。このことから考えれば、「戸が閉じられた」ということはたとえにとつて重要な意味を持っているはずである。決定的な時が迫っているのであり、そのための準備を怠るなら、取り返しのつかない事態に陥ってしまう。

⑥ 目覚めていなさい（13節）

⑤節では「賢いおとめたち」も含めて全員が眠り込んでしまっているから、「目覚めていなさい」はたとえと合わない勧告であると言える。イエスのたとえにマタイが加えた解釈なのか、あるいは「目覚めている」が「準備を怠らないうちに」といった意味で使われているか、どちらかである。いずれにしても、非難されているのは眠り込んだことではなく、準備を怠ったことである。

⑦ 灯火をともし続ける

⑥真夜中に、「見よ、花婿が」という叫び声があがり、おとめたちは起き上がり、「自分たちの灯火」から燃えかすを取り除き、再び燃えるようにと油をつぎたす。「愚かなおとめ」も「賢いおとめ」も灯火を「整える」段階までは同じであるが、灯火が消えかかっているのに気づいたとき、両者の差は歴然とする。油の用意を怠った「愚かなおとめ」は頼みを断られ、店に走らねばならない羽目に陥る。

⑥なぜ油を分けてほしいという願いを退けるのか。このたとえがキリスト者の取るべき姿勢を教えているのなら、共同体の仲間と油を分け合うことが勧められるのではないかという疑問が起こるかもしれない。しかし、たとえが語っているのは、自分の灯火を燃やし続けるための油は自分が用意しなければならぬということであり、賢さのしるしとなる「油」は、簡単には分け与えることのできない何かなのである。

⑦「愚かなおとめ」が油を買いに出ている間に、花婿が来て戸が閉じられてしまう。油を「準備している」五人は婚宴の席に入り、「残った」おとめたちは「私はあなたがたを知らない」と断られてしまう。こうして、十人のおとめの間にはつきりとした「分離」が生じる。この「分離」をもたらしたのは「油」である。「十人のおとめ」のたとえは、イエスによつて語られた原初の形では「油」は重要な役割を演じていなかったかもしれない。しかし、マタイでは「油」はおとめの運命を決定するものになっている。花婿の到来（キリストの再臨）に向かって用意すべきものは「油」である。

⑧マタイ5章16節に「あなたがたの光は人々の前で輝け。人々が、あなたがたの善い業を見て、あなたがたの天の父をあがめるために」とあるから、マタイにとつて「灯火」は「善い業」を意味していると思われる。しかし、マタイ5章の「光」は神から来る光であり、「あなたがたの光は輝け」とは、「あなたがたが神から受けた光が輝くのに任せよ」という意味である。あなたがたが善い業を行う力は神から来る。だからこそ、人々はあなたがたではなく神をあがめる。あなたがたの善い業は神との交わりの中で行われる。そこには神の業を見つめ続けさせる聖霊が与えられている。そうであるなら、灯火をともし続けるための「油」は聖霊を指しているのだろう（1テサ5:19）。神が与える聖霊であり、善い業であるから、それは他人から分けともらうことではない。神との交わりは与えられたその人自身が保ち続けなければならないものだからである。